

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 2 5 2 号

2023 年 4 月 1 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.wjg.jp>

小西芳之助導源先生「コリント人への第 2 の手紙講解説教」より (8)

献金は種を播くようなもの

「わたしの考えはこうである。少ししかまかない者は、少ししか刈り取らず、豊かにまく者は、豊かに刈り取ることになる。」(コリント II 9.6)

献金のことについては、パウロは確信を持っていたようであります。それを一言で言い表すならば、この 6 節になると思います。経済学上の言葉で言えば、この献金と言うものは投資になり、必ず報いてくる。即ち、他の言葉で言えば、これは種をまくようなものである、という確信を持っておりました。これは、パウロの 60 年の生涯から出た確信であります。ここで、刈り取るということは、霊的に見えざる収穫というものと、見得る収穫とがあります。これは驚くべきことであります。我々は、施すということを致しませんもので、施しによる豊かな恵みというものを経験しておりませんが、施しをしないことは、人生における大きな損失であります。コリントの教会では、信仰の理論はパウロか

ら聴いておりますが、まだ、信仰が血となり、肉となっておりません。ですから、施しが出来ない。パウロは柔らかに、「献金と言う者は、投資のようなものであり、蒔いたら刈り取る。霊的なものを刈り取ると共に、物的なものを刈り取る。」とパウロの確信を述べました。これは人生の経験から確かなことでありまして、我々も自分の生活において経験できることでもあります。

与えれば与えるほど、与えられる

「神はあなたがたにあらゆる恵みを豊かに与え、あなたがたを常にすべてのことに満ち足らせ、すべての良いわざに富ませる力のある方なのである。」(コリントⅡ 9.8)

我々にもし能力があり、金や名誉があるとすれば、それは、自分のためではなく、人のために、人を豊かにさせるためにあるのである、という。これは大事なことです。我々の健康があるとすれば、自分の健康は、自分が楽しむためのものではない。人のためにこの健康があるのであります。我々にもし頭脳が働くとなれば、人のために使う。頭脳でも、本当に人のためにそれを働かせたなら、頭脳が益々はっきりして来ます。自分のために金を使っていたら、すぐなくなってしまう。人のために使っていれば、金はなくなりません。貧乏人には金があります。献金でも、すればする程、献金する金と与えられてくる。献金を渋っていたら、益々献金が出来なくなります。教会でも献金しているのは大体において貧乏人です。与えれば与える程、与えられる。これを即ち、「豊かな人生」と言います。福音は我々を豊かにする力を持っています。

献金は信仰のバロメーター

教会は献金を勧めるべきところではありません。信仰を説くべき所でありませぬ。信仰が分かったら、自然と献金が現れて来ます。要するにパウロは、[コリント後書] 8章および9章で献金のことを書いておりますが、神の賜物、イエス・キリスト、永遠の生命、それを受けた者が人を助ける義務のあることを論じた場所であります。献金は最も俗のことではありますが、最も大事なことであることが分かります。これによって信仰が分かります。献金はまさに信仰のバロメーターであります。

繰り返しになりますが、以上をまとめると、次のようになります。

- 第1、 献金は投資みたいなものであること。必ず報いてくること。
- 第2、 神はその投資をする材料を下さること。無限に下さるのだから、将来の心配は無用であること。
- 第3、 与えた者と、与えられた者とが神を賛美して一体になること。不思議なことに神の恵みが分かるにつれて、与える事が出来るようになること。これは奇蹟です。

10年後の感想——与うるは受くるよりも幸いなり

孔子が、論語の第1ページに、「学びて時にこれを習う、また説（よろこ）ばしからずや」と言っておられますが、我々、真理というものを聞いて、これを復習しなければなりません。特に、新しい、生まれつき持っていない、真理は我々にとって外国語のようなものです。外国語は繰り返し習得しなければものになりません。それと同じく施しの精神も、〔コリント後書〕8, 9章で学んだ如く、イエス・キリストの贖い、我々の神に対する無限の、その贖いから来ています。イエス・キリストが、天にある神と等しき状態の無限の富を捨てて人間と生まれて、十字架上で我々の罪を贖って、我々に永遠の生命の富を与え給うた。その福音の理解に応じて、我々に「与うる精神」が与えられます。我々も福音を聖霊によって理解させて頂き、徐々に与える人になりたい。我々は、繰り返し繰り返し学んで、豊富な人生を送りたいと思います。

よく「十分の一献金」ということを言いますが、私も、平信徒であった頃は、収入の10分の一を献金することは不可能でした。幸い、数年前から、決まった収入は10分の一献金し、臨時収入の部分からは2割を別に用意して、献金あるいは困っている人のために使っておりますが、非常に豊かです。私は、何もかも本当に満ち満ちております。どうぞ、皆様も、福音を聞かれまして、「与うるの生涯」を送られるようにと思います。パウロは聖書のなかで、「与うるは受くるよりも幸いなり」という言葉を引用しております。

77 にして心身安楽なり

私らが同志会におりました頃、石館兄弟が、武者小路実篤さんの書かれた「幸福者」を非常な感銘を持って読まれ、金曜会の晩に「何々する者は幸せだ、何々する者は幸せだ」と声高らかにお読みになったことを昨日のごとく思い出します。その武者小路さんが名誉都民になられた時に、「私は 60 歳を過ぎて少しく人生の意義が分かりだした。今 80 歳を超えて実に幸いである」と述懐されたことを思い出します。彼も壮年時代に、人生の幸福というものを一瞥され、80 を過ぎて、いよいよ自分の生命になって来られた、という感を受けました。私達の信仰も、若い時にパッと光りをうけますが、それが我々の身にこなれてくるまでには、相当の時間がかかるように思います。どうぞ諸君も、現在は光の一瞥に過ぎませんが、辛抱して続けているうちに、だんだんと自分のものになってきます。私は 77 歳になりまして、「77 にして心身安楽なり」という感じがします。

このままで わが主イエスの 名を呼べば

今日の務めも やすらかりけり

やさしさと寛大さ

「さて『あなたがたの間において面と向かってはおとなしいが、はなれていると、気が強くなる」、このパウロが、キリストの優しさ、寛大さをもって、あなたがたに勧める。」(コリントⅡ 10.1)

これが、10章でいわんとするパウロの概説、大体の精神であります。括弧の内容は、反対者によるパウロに対する非難です。ここの「勧める」という字は非常に強い言葉であり、反対者の君たちに強く望むという意味であります。「キリストの優しさ、寛大さ」とありますが、「優しさ、寛大さ」これがキリスト者の特徴、愛の精神の標本的な現れです。我々の信仰のバロメータはここに出て来ます。本当に強いクリスチャンは、本当に優しい。この優しいは、英語では「meek」と書いてありますが、聖書には、モーセは地上におけるどの人間よりも優しくたと書かれています。相撲界でも、大鵬と柏戸を比較したら、大鵬の方は柔軟で、体あたりしてもふわっとあたっているような気がするそうです。…老人は転ぶと直ぐ怪我をしますが、子供は柔軟なために、多少のことでは怪我をしたりしません。パウロにはこの柔らかい心があるから、福音を素直に受け入れることが出来る。キリストが我々の罪のために死んでくださり、永遠の生命を与えて下さった。「あ、そうか」と素直な心があるから、パット移ります。…パウロは、このやさしさと寛大さをもって、反対者であるあなた方にこれから勧めると言っているのです。

クリスチャンの武器

〔コリント後書 10 章 4 節の〕「武器」については、エペソ書 6 章 13 節に、「神の武具をつけなさい」とあり、また 6 章 14－17 節にパウロの武器の説明があります。「すなわち、立って真理の帯を腰にしめ、正義の胸当てを胸につけ、平和の福音の備えを足にはき、その上に、信仰のたてを手に取りなさい。それをもって、悪しき者の放つ火の矢を消すことができるであろう。また、救いのかぶとをかぶり、御霊の劔、即ち、神の言（ことば）を取りなさい。」我々は、この武器を知りません。信者はこういう武器をもっています。…

「神によって力強い」というのがキリスト者の武器の特徴であります。これは人には見えません。クリスチャンの武器というものは、大体において己に向かっております。他の人に向かっていません。人に向かっているのもは大体において肉の事が多い。信者の信仰が進めば進むほど、武器は自分に向かってきます。20 年、30 年信仰生活をしている我々がちっとも進んでいないのは、キリストの信仰を内に向けていないからです。これは、すごい武器です。我々はこういう武器を知る必要があります。人生の妙味はここに在ります。人生の深さは己にあります。人からは見えません。イエスもパウロも外から見たら弱く見えます。キリスト教は弱いという批判がありますが、そこが強いところ、キリスト教の生命、そこが普通の人には見えません。

福音の本当のご利益は自分に克つこと

福音の内容はつまらないものです。語る時は、雄弁に語るものではありません。謙遜をもって語るものです。これはつまらなく、弱々しく見える。これは、伝道者の特徴をよく言い表しています。批判というものは本質を言い当てています。しかし一旦、信仰を受けた時に、本当に力が出て来る。その力は、自分に向かっている。真に己に克つ者となることができる。これが福音の特徴であると思います。パウロは、自分の欲する善をなすことが出来ない、そして欲せざる悪をなすと。この死の身体より我を救わん者は誰ぞ、と嘆きました。それが、いよいよキリストの救いが分かり、永遠不滅の霊体を着せられると分かった時に、我々に力を与えるキリストの名において、何事もなすことができる、と豪語しました。即ち、自分に克つことができることでもあります。福音の本当のご利益は自分に克つこと、これがないということは、福音が分かっていないことを意味すると、私は信じます。

伝道者は、聖書の真理を宣伝する義務がある

本当の伝道者は、パウロの如く、肉にありながら、霊に従って歩む者であります。即ち、永遠の不滅の身体を目当てにして歩いている。永遠の生命の福音を宣べているかいないかが、伝道者のポイントであります。大きな教会を建て、多くの信者を集めることは、伝道の本質ではありません。そういうことを、私は学生時代に米国の宣教師モーク先生から学びました。先生は、白山教会の立派なコンクリートの建物が出来て、みんなが喜んでいる時に、「神はセメントのうちに住み給わず」と英語で言われました。日本語ではっきり言ったら分かったでしょうが、みんなはそれを認識していませんでした。私は、大きな声で言いたかったのですが、その場の雰囲気が壊れると思ってやめたことを覚えています。私はこのモーク先生にお会いできたことの幸いを感じます。キリスト者とはどういう者かをモーク先生から学びました。信者は、外へ向くものではなく、内へ向いているものです。この世の業績を見ずに、天を見ている者です。キリスト者は巡礼者です。「わが平安を汝に残す。わが喜びを汝に満たさんためなり」の喜びと平安は、そういう人が持っています。この世のもの、偉大なる学問上の発見、人類の偉大なる宝、このように目に見える宝は、偉大ではありませんが、キリスト教の真理に比べれば、光を失うべきものであります。たとえ専門的な知識に秀でている学者であっても、霊については素人です。伝道者は遠慮する必要はない。聖書に立って、聖書の真理を宣伝する義務があります。

10年後の感想——福音の話はつまらない

〔コリント後書 10 章〕 10 節にあるように、「彼の手紙は重みがあって力強いが、会ってみると外見は弱々しく、話はつまらない」と言っていると思いますが、これは、伝道者の姿を現すのにまことにふさわしい表現だと思います。一つの条件は、外見が弱々しいこと。本当の福音の勇者は、偉い顔をしておりません。大きな声で人を圧倒するようなものではありません。本当の伝道者は誠に「meek」で、柔和なものです。信仰が分かてきたら、柔和になって来ます。人相が変わって来ます。本物の特徴は弱々しく見えることです。もう一つの特徴は、話が詰まらないこと。これが福音の内容です。福音の内容は、普通の人、生まれつきの人が聞いたら、つまらない話です。人に親切をせよとか、良い行いをせよ、という話は分かりやすい。これはつまる話です。よろしいですか。福音の話はつまる話ではありません。つまらない話です。福音の内容は、イエスが十字架にかかって、我々のために死んで、我々のすべてを処分して、我々のすべての罪を帳消しにして、我々に永遠不滅の生命を与えて下さった。それによって、我々はこの世が終わったら天国へ行って、復活するものである。これが福音の内容であります。これは人が聞いたらつまらない話です。私はこれを、ここで死ぬまで宣べ伝えます。